

大学入試改革： センター試験・ 新テスト・ 高大接続

大学入試センター試験・研究副統括官 山地 弘起
第5回情報教育研究会 IN 江戸川大学 (2017. 7.30)



センターの目的と業務（独立行政法人大学入試センター法）

■（センターの目的）

第三条 独立行政法人大学入試センター（以下「センター」という。）は、大学に入学を志願する者に対し大学が共同して実施することとする試験に関する業務等を行うことにより、大学の入学者の選抜の改善を図り、もって大学及び高等学校（中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部を含む。以下同じ。）における教育の振興に資することを目的とする。

■（業務の範囲）

第十三条 センターは、第三条の目的を達成するため、次の業務を行う。

- 一 大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として大学が共同して実施することとする試験に関し、問題の作成及び採点その他一括して処理することが適当な業務を行うこと。
- 二 大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査及び研究を行うこと。
- 三 大学に入学を志望する者の進路選択に資するための大学に関する情報の提供を行うこと。

センター試験が果たす役割

■ 難問奇問を排除した、良質な問題の確保

- 問題作成 = 第1委員会 ← 問題作成OB委員会によるチェック
+ 高校教育関係者等を中心とする点検協力者によるチェック
- 試験実施後の試験問題評価委員会による評価
- 問題公開による各方面からの問題照会

■ 個別試験との組合せによる入試の個性化・多様化

- 小論文・面接 推薦入試・AO入試
帰国子女・社会人対象特別入試 etc.

■ 配慮を要する受験生への対応

- 拡大文字問題冊子（14ポ・22ポ） 点字問題冊子
- 点字解答（1.5倍延長） 文字・チェック・代筆解答（1.3倍延長）

3

問題作成の体制 = 第一委員会

■ 教科科目第一委員会（平成29年度試験）

- 「国語」、「地理歴史（世界史、日本史、地理）」、「公民（現代社会、倫理、政治・経済）」、「数学（数学I、数学II、簿記・会計、情報関係基礎）」、「理科（物理、化学、生物、地学）」、「外国語（英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語）」6教科 20科目
- + 特別問題作成部会（点字、拡大文字等の受験上の配慮を要する受験生向けの試験問題作成） **21委員会**
- 国公立大学等の教員および学識経験者約420名（任期は原則2年で半数ずつ交代）
- 問題作成は大学入試センターの問題作成棟に限られ、**1年に45日程度**、委員が集合して問題作成
- **本試験と追・再試験の2セットずつ**の問題作成
- 学習指導要領改訂時期は、大きな災害や問題漏洩などの事故が起こったときに備えて**緊急対応**の問題作成（概ね10年間程度保管）

4

問題点検の体制①

■教科科目第二委員会

問題の内容、構成、解答の一意性などについて詳細に点検。

第一委員会の経験者中心（OB委員会）。各委員会4～10名程度、計19委員会（「現代社会」と「政治・経済」、および「数学I・IA」と「数学II・IIB」は一委員会。用字用語委員会を含む。）、約150名で、大学入試センター問題作成棟において、年に3回程度（1回は5日程度）点検。

点検結果は意見書に記載され、主要点について、センター統括官・副統括官・調整官が口頭で意見受領し、第一委員会に伝達（問題作成・点検に関わる委員は、専門領域が近い可能性が高く、お互いが知り合いであったりする場合も想定され、委員の固有名詞は知り合えない形で、センターの統括官以下が仲介する）。

■点検協力者

高校教育の立場から、直接高校の授業を担当していない指導主事や管理職教師などにより、問題の難易度および出題範囲の適切性について点検。

■教科科目第三委員会

科目横断的に、科目間の重複や整合性、形式や表現、内容の適切性などについて点検。

各科目専門の委員は1～2名程度で、基本的に異なる専門の、第一委員会等の経験者、センターの統括官・副統括官・調整官ら、30名弱で構成。

問題点検の体制②

■試験問題評価委員会

試験実施後の、高校教育関係者、第一委員会等による試験問題の評価。

外部評価分科会：高校教育関係者による、各科目ごと数名程度ずつで、大学入試センターに参集して、試験問題の評価を行う。

自己点検・評価分科会：第一委員会委員自身による、試験問題の自己評価を行う。

評価結果は、関係学会の評価も含めて、試験問題評価委員会報告書に記載（Webに公開）。

<http://www.dnc.ac.jp/data/hyouka.html>

■外部からの問題照会

センター試験問題は、試験実施後すぐに新聞等に公表。

受験生・受験生保護者、外部一般の高校教師、予備校教師、大学教員、学会等からの質問や指摘が多く寄せられる。

各科目の第一委員会で検討して回答案を作成し、試験・研究統括官名により返答。

問題作成にフィードバックされることにもなることから、試験問題を公開するということ自体が、センター試験問題の一つの点検機会になる。

受験上の配慮を要する受験生への対応

■ 諸配慮の例

- 試験問題の点字化
- 14ポイント拡大文字・22ポイント拡大文字（平成28年度より）
- マーク方式によらない文字またはチェックによる解答
- 代筆による解答
- 試験時間の延長
- 補聴器または人工内耳の装用
- 手話通訳者の配置
- リスニングの免除
- 特定試験室の指定
- 介助者の配置 *etc.*

- **平成29年度実績**： 受験上の配慮許可された受験生総数**2,594人**（視覚障害101人、聴覚障害417人、肢体不自由285人、病弱102人、発達障害249人、その他1,440人）

7

センター試験問題作成の基本方針

- 高等学校学習指導要領に準拠し、**学習指導要領解説及び教科書に基づく**
- 基礎的事項の理解の程度を見るほか、**思考力や応用力を見る問題**を出題
- どの教科書によって学んだかによって**不公平が生じない**ように配慮
- 思想、信条、宗教、民族及び性等に関する内容、社会的に問題とされやすい内容の取扱いについては、**教育的に公平**であることに留意
- 公表正解選択肢のほかに正解となることがないように注意（**正解の一意性**）
- **各科目の平均点は60点程度を目標**
- 極端な**難問は回避**
- 試験問題数が**試験時間に適切な分量となるように配慮**
 - 「**良問**」は、個々の問題について**独立に評価できるものではなく**、それを含む構成されたテスト全体が、以上のような観点から、総合的に評価されるべき

8

第1問 科学部の生物班と地学班が自由研究に取り組んだ。この自由研究に関する次の文章(A・B)を読み、下の問い(問1～5)に答えよ。
(解答番号 1 ～ 7) (配点 25)

A 生物班のユキさんとサトシさんは、学校で学んだ遺伝の法則によって、身のまわりで観察される遺伝現象を説明できるかどうか、調べることにした。

問1 二人は、赤花と白花のマツバボタンの子種を買ひ、別々のプランターにまいた(これを親世代とする)。やがて花が咲いたので、赤花の花粉を白花のめしべに受粉させた。得られた種子(F₁世代)を発芽させ、花が咲くまで育てた。F₁世代の株はほぼすべて赤い花を咲かせたが、白い花を咲かせる株もわずかに混じっていた。この実験に関する次の問い(a・b)に答えよ。

a 実験結果に関する次の会話文中の空欄ア～ウに入れる語の組合せとして最も適当なものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。
1

	ア	イ	ウ
①	優性	赤花	ホモ
②	優性	赤花	ヘテロ
③	優性	白花	ホモ
④	優性	白花	ヘテロ
⑤	劣性	赤花	ホモ
⑥	劣性	赤花	ヘテロ
⑦	劣性	白花	ホモ
⑧	劣性	白花	ヘテロ

b 二人は、科学部の後輩のためにこの実験の方法をまとめた。実験方法の留意点を述べた次の文I～IIIについて、正しい文の組合せとして最も適当なものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。 2

- I 交雑が起こりやすくなるように、赤花の株と白花の株は一つのプランターに混ぜて植える方がよい。
- II 交雑と自家受粉の区別をつけやすくするため、白花の花粉を赤花のめしべにつける組合せがよい。

◆平成27年・本試験・理科総合B・第1問A

第1問A 学校の自由研究という高校の日常的な学習活動の流れの中で、現実には理想的状態ではなく、何らかの要因によって「すべて」ではなく、一部例外的な現象が観測されるということ、また、そのようなことを極力小さくするためにどのような実験的な工夫が必要とされるかを問う問題。生物、遺伝の知識のみならず、実験等をどう構想し、その結果をどう評価すべきかという、「さまざまな課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 (Cf. 全国学力・学習状況調査)」に関わる問題。

◇高等学校教科担当教員の意見・評価 遺伝に関する設問は計算問題に偏りやすいが、問1は観察方法の留意点も問うており、このような問題を探究活動の経験を基に考察できる力を養うべきであることを示唆する良問である。

◇日本生物教育学会 一遺伝子雑種による遺伝の法則についての実験や調査を通して、その結果と考察などの科学的な思考力を問う基本的な良問である。問題の難易度は大問全体として平易である。(②・⑥ 正答率8割弱・5割強)

B 次の問い(問1～3)の段落には、まとまりをよくするために取り除いた方がよい文が一つある。取り除く文として最も適当なものを、それぞれ下線部①～④のうちから一つずつ選べ。

問1 29

Children between the ages of three and five begin to ask many questions.

- ① The average weight of children around these ages is more than 12 kilograms.
 - ② The way parents handle their children's questions is important.
 - ③ Some parents may be proud of their children's development and happily answer all their questions.
 - ④ This encourages children to use their imagination and become more creative.
- On the other hand, if parents are not patient enough to answer questions, children might feel that they shouldn't be curious about things. As a result, they may begin to feel nervous about trying new activities.

問2 30

Which do you prefer, living in the country or in the city? ① According to a United Nations survey, half of the seven billion people on this planet are living in the countryside. However, more and more people are moving into urban areas. ② It is estimated that about two thirds of the world's population will live in cities within the next 35 years. ③ Living in a city apartment is convenient but sometimes lonely. ④ Cities are likely to be too crowded and become very difficult places to live. Having said that, due to recent population trends, we soon may not have a choice about where to live.

◆平成26年・本試験 英語・第3問B

◇高等学校教科担当教員による評価

今年度は「段落のまとまりをよくするために取り除いた方がよい文」を選ぶという、新しい形式が出題された。昨年までは異なる問題に戸惑った受験者もいたかもしれないが、論理的でまとまりのある文章を書くために必要な力を見ることが出来る良問である。英文は基本的で平易な語句を使って書かれており、文脈も分かりやすいので、普段から論理的に文章を書くことを心掛けている受験者にとっては、解答しやすい問題であったはずである。(①・③ 正答率3/4強・6割強)

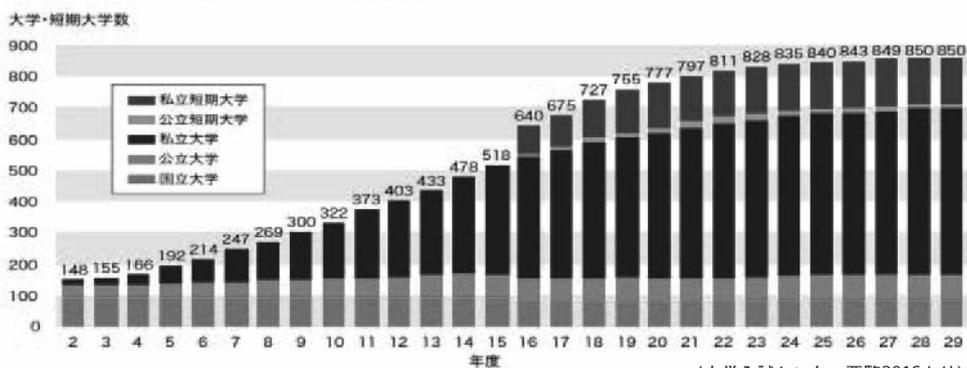
(問題作成部会：日本人学習者の談話能力の育成が強調されていることを踏まえると、英語の授業に教育的な示唆を与える問題と考える。)

→ 文章の書き方などについて言葉で説明はできなかったとしても、適切でない部分がどこであるかは指摘できるということで、文章の推敲可能性にはつながると考えられる。ある種のメタ認知に関わる問題と位置づけられる。

= 潜在的理理解

センター試験への参加大学数の推移

●大学入試センター試験参加大学・短期大学数



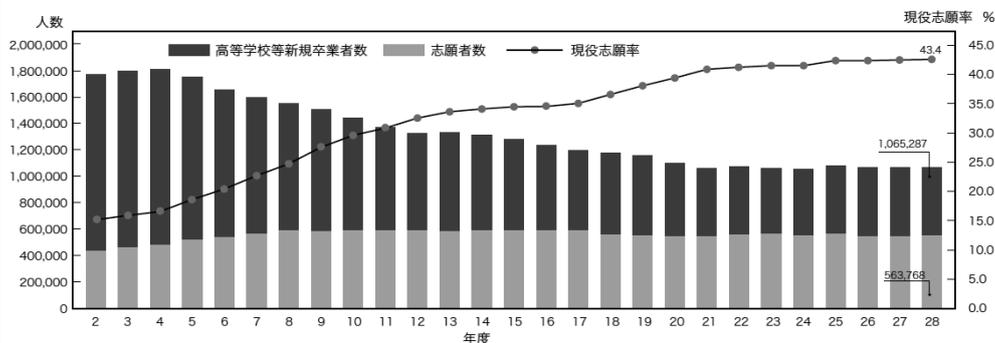
(大学入試センター要覧2016より)

cf. 平成29年度試験確定：848大学・短大 (77.3%)

大学 (単独の大学院大学を除く) 694 (91.6%) : 国立大学82 (100%) 公立大学86 (96.7%) 私立大学526 (89.9%)
 短大154 (45.2%) : 公立短大15 (88.2%) 私立短大139 (42.9%)

センター試験の志願者数の推移

●志願者数及び現役志願率の推移



(大学入試センター要覧2016より)

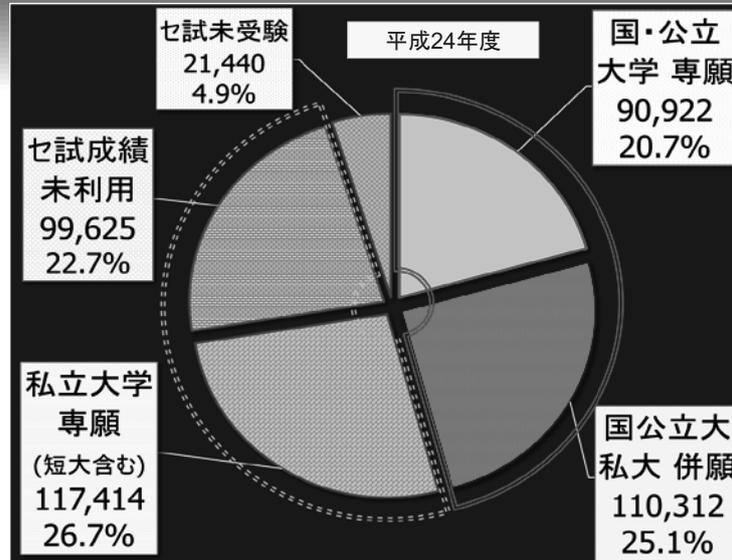
cf. 平成29年度 (2017) センター試験志願者:

志願者総数 575,967人 (12,199人増)

現役志願者数 471,842人 (9,507人増) 現役志願率 約43.9% (過去最高)

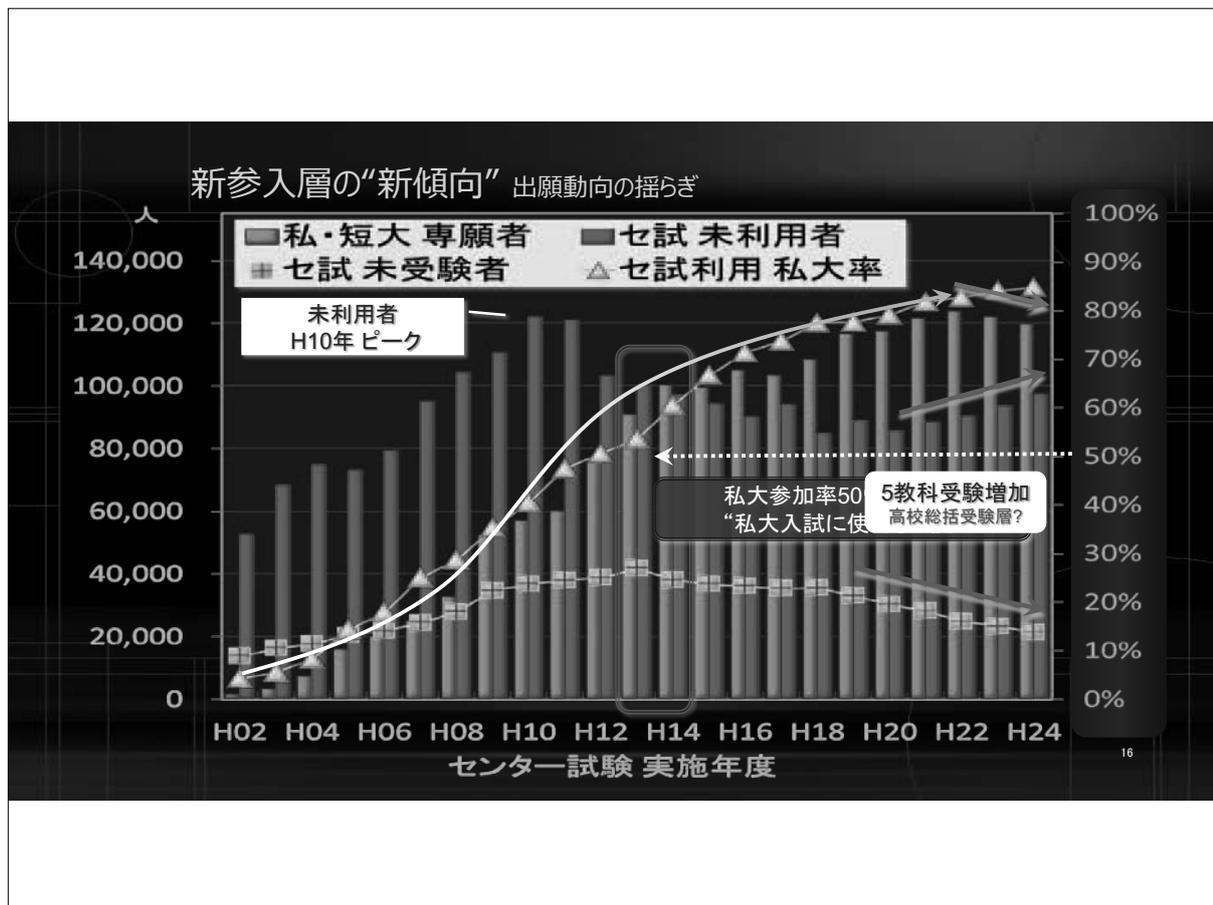
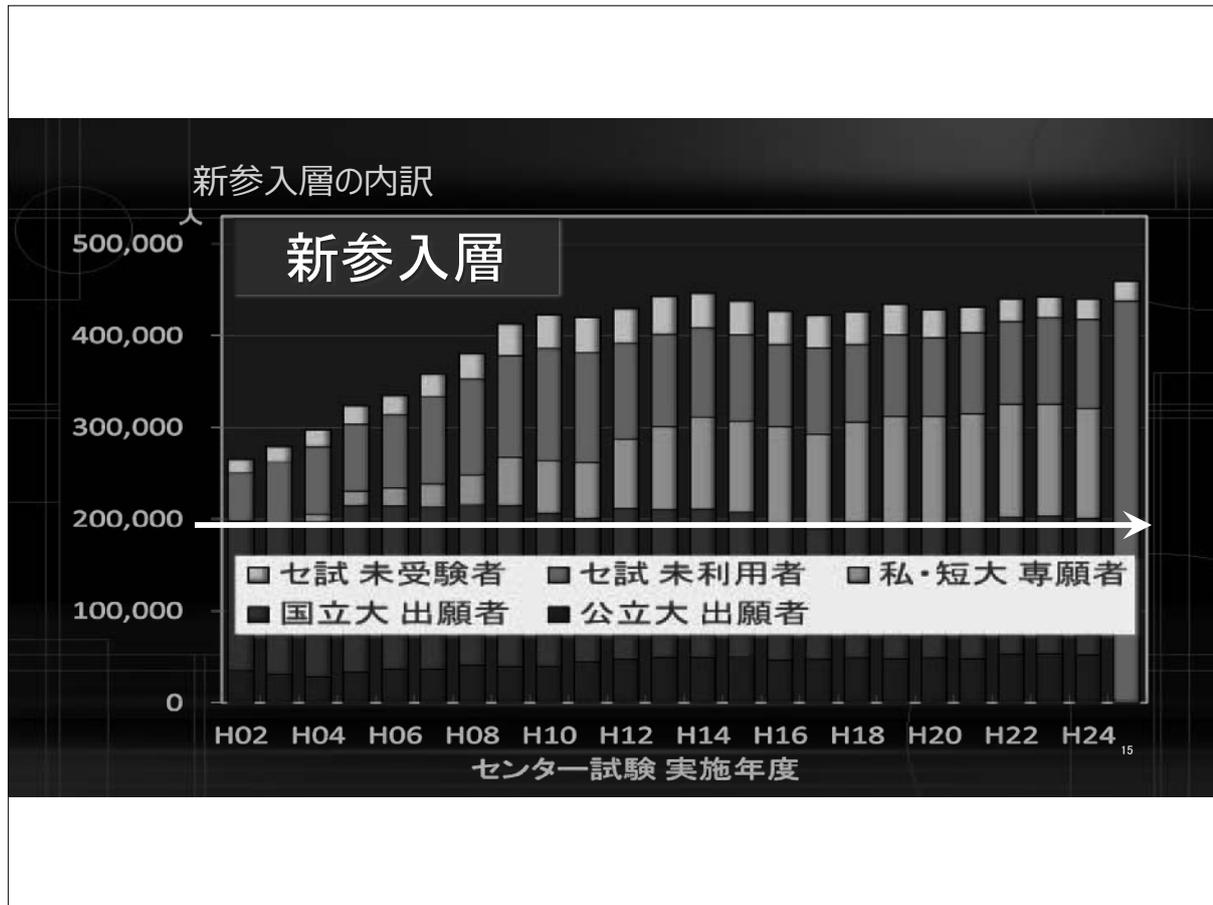
成績提供件数 1,560,871件 (61,290件増)

新卒志願者の出願類型(鈴木の4分割)

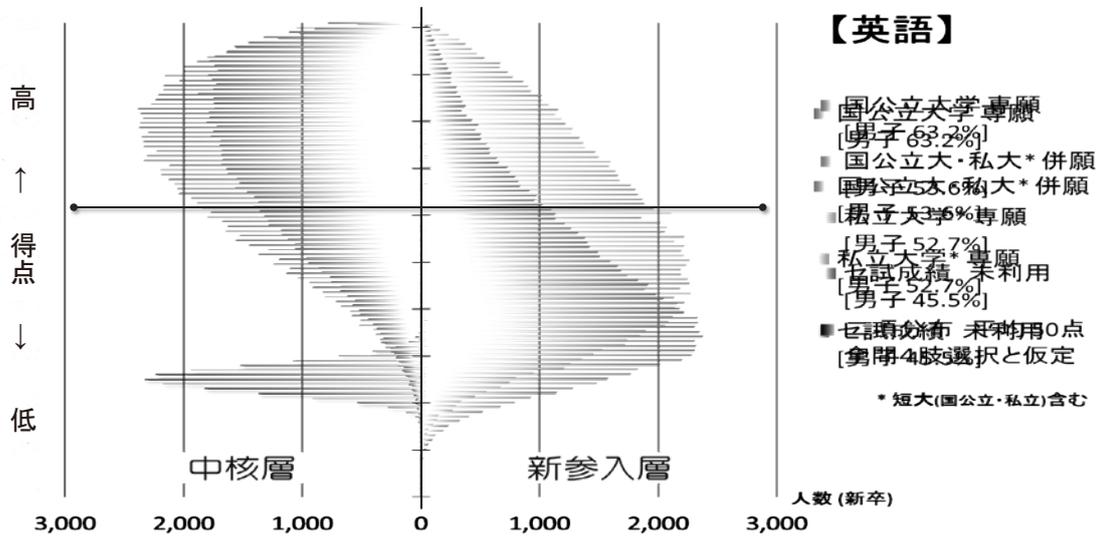


センター試験志願者の2層構造化

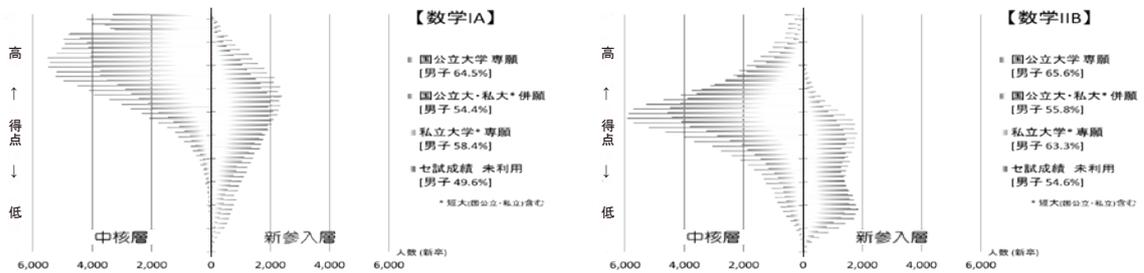




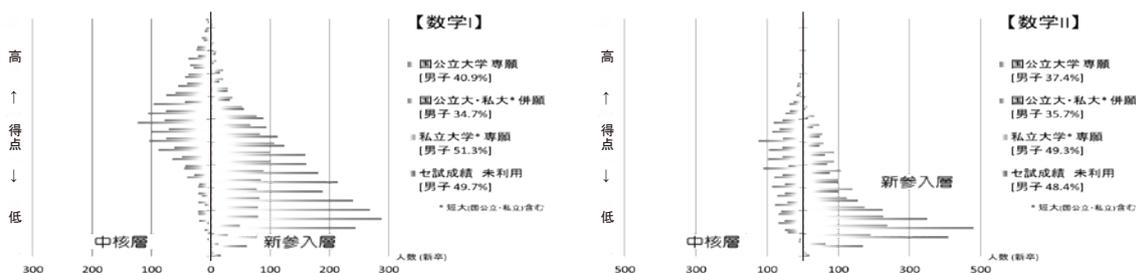
英語筆記：受験層別同学力の解き方概観...



数学 IA/IIB: 新参入層_受験少数・低成績



数学 I/II 成績未利用者の偏在



以上の出典:

内田照久・橋本貴充・鈴木規夫 (2014). 18歳人口減少期のセンター試験の出願状況の年次推移と地域特性 —志願者の2層構造化と出願行動の地域特徴— 日本テスト学会誌, **10**(1), 47-68.

内田照久・中村裕行・橋本貴充・鈴木規夫・荒井克弘 (2016). センター試験の受験目的の多様化と学力分布の層別特性 大学入試センター紀要, **45**, 1-11.

新テストへの移行

- センター試験の総括や今後の展望が不十分なまま
- 大学ではなく文科省主導 ← **高校教育への影響に主眼**
【記述式の導入(国・数), マークシート問題の改善, 英語4技能の外部試験活用]
- センターでは昨年夏に新テスト実施企画本部が始動、今年4月に新テスト実施企画部を新設
- センターに求められる個別入試支援 ← 多様な高校・多様な大学の間で望まれる高大接続とは?
 - ・ 個別選抜やアドミッションオフィス強化等の方法開発
 - ・ 面接や集団討論等を含むテスト方法開発
 - ・ 調査書の評価等を含む評価に関する方法開発
 - ・ 専門的人材の育成
 - ・ 入学者選抜や学力評価についての新しい方法の開発
 - ・ 以上に関わる国内外の調査及び情報発信等

高大接続改革に関する中教審答申(2014年12月)及び高大接続システム改革会議の最終報告(2016年3月)、大学入学共通テスト実施方針(2017年7月)より

「大学入学共通テスト」実施方針より

2. 目的

共通テストは、大学入学希望者を対象に、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とする。このため、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力を中心に評価を行うものとする。

8. マークシート式問題の見直し

- 思考力・判断力・表現力を一層重視した作問への見直し
次期学習指導要領の方向性を踏まえ、各教科・科目の特質に応じ、より思考力・判断力・表現力を重視した作問となるよう見直しを図る。

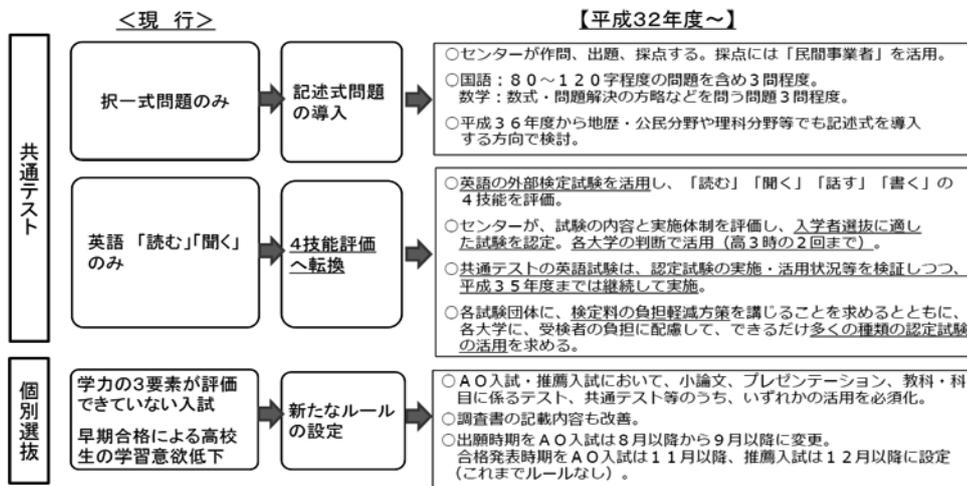
10. 実施期日等

- 共通テストの実施期日は、1月中旬の2日間とする。
- マークシート式問題と国語、数学の記述式問題は同一日程で、当該教科の試験時間内に実施する。
- 成績提供時期については、現行の1月末から2月初旬頃の設定から、記述式問題のプレテスト等を踏まえ、1週間程度遅らせる方向で検討する。

21

大学入学者選抜改革

- ◆ 受検生の「学力の3要素」について、多面的・総合的に評価する入試に転換
① 知識・技能 ② 思考力・判断力・表現力 ③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
- ◆ 高大接続改革実行プラン、高大接続システム改革会議最終報告に沿って、大学入学者選抜の改革を着実に推進
- ◆ 平成32年度「大学入学共通テスト」開始 ※記述式、英語4技能
平成36年度 新学習指導要領を前提に更に改革



6. 記述式問題の実施方法等

(1) 国語

①出題の範囲

記述式問題の出題範囲は、「国語総合」（古文・漢文を除く。）の内容とする。

②評価すべき能力・問題類型等

多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめたり、その過程や結果について、相手が正確に理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を評価する。

設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式とし、特に「論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視する。

③出題・採点方法

- 記述式問題の作問、出題、採点はセンターにおいて行う。
- 多数の受検者の答案を短期間で正確に採点するため、その能力を有する民間事業者を有効に活用する。
- センターが記述式問題の採点結果をマークシート式問題の成績とともに大学に提供し、各大学においてその結果を活用する。

23

(2) 数学

①出題の範囲

記述式問題の出題科目は、「数学Ⅰ」「数学Ⅰ・数学A」とし、出題範囲は「数学Ⅰ」の内容とする。

②評価すべき能力・問題類型等

図表やグラフ・文章などを用いて考えたことを数式などで表したり、問題解決の方略などを正しく書き表したりする力などを評価する。

特に、「数学を活用した問題解決に向けて構想・見通しを立てること」に関わる能力の評価を重視する。

③出題・採点方法

- 記述式問題の作問、出題、採点はセンターにおいて行う。
- 多数の受検者の答案を短期間で正確に採点するため、その能力を有する民間事業者を有効に活用する。

<#>

7. 英語の4技能評価

○ 高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する。

○ 具体的には、以下の方法により実施する。

- ① 資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定し（以下、認定を受けた資格・検定試験を「認定試験」という。）、その試験結果及びCEFR（※）の段階別成績表示を要請のあった大学に提供する。

このような方式をとることにより、学習指導要領との整合性、実施場所の確保、セキュリティや信頼性等を担保するとともに、認定に当たり、各資格・検定試験実施団体に対し、共通テスト受検者の認定試験検定料の負担軽減方策や障害のある受検者のための環境整備策を講じることなどを求める。

また、認定試験を活用する場合は、受検者の負担に配慮して、できるだけ多くの種類の認定試験を対象として活用するよう各大学に求める。

※ CEFR…(Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment)の略称。外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠。

- ② 国は、活用の参考となるよう、CEFRの段階別成績表示による対照表を提示する。

- ③ センターは、受検者の負担、高等学校教育への影響等を考慮し、高校3年の4月～12月の間の2回までの試験結果を各大学に送付することとする。

- ④ 共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用することを可能とする。

- ⑤ 各大学は、認定試験の活用や、個別試験により英語4技能を総合的に評価するよう努める。

○ なお、認定試験では対応できない受検者への対応のための共通テストの英語試験の実施については、別途検討する。

9. 結果の表示

(1) マークシート式問題

各大学において、入学者受入れ方針に応じたきめ細かい選抜に活用できるよう、大学のニーズも踏まえつつ、現行の大学入試センター試験よりも詳細な情報を大学に提供する。

提供する情報の内容については、以下の事項を含め、今後、プレテスト等の状況も踏まえつつ検討し、平成29年度中に結論を得る。

- ・ 設問、領域、分野ごとの成績
- ・ 全受検者の中での当該受検者の成績を表す段階別表示

(2) 記述式問題

設問ごとに設定した正答の条件（形式面・内容面）への適合性を判定し、その結果を段階別で表すことなどについて検討する。

結果の表示の仕方については、国語、数学の科目特性や試験問題の構成の在り方も踏まえ、プレテスト等を通じて明確化する。

#>

		28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度
「大学入学共通テスト」の導入			「実施方針」の策定・公表 (29年7月)	プレテストの実施 (30年度目途)	「実施大綱」の策定・公表 (31年度初頭目途)	確認プレテストの実施 (31年度目途)	「大学入学共通テスト」の実施	「実施大綱」の策定・公表	「実施大綱」の策定・公表	「実施大綱」の策定・公表
			プレテストの実施 (29年度)				「実施大綱」の策定・公表			
										「実施大綱」の策定・公表
										「実施大綱」の策定・公表
プレテスト等	フィージビリティ検証事業									
	受検者数	約1千人	5万人規模	10万人規模						
	対象者	大学1年生	原則、高校2年生以上 (一部、高校3年生以上を含む)	高校3年生						
	対象教科等	国語、数学	国語、数学、地歴・公民、理科、英語、特別の配慮等	国語、数学、地歴・公民、理科、英語、特別の配慮等 ※具体的対象科目は要検討						
	実施時期	11月、2～3月	11月 (一部、2月頃)	12月頃						

<#>

パフォーマンス型試験への要請と課題

■大規模・共通一斉 → マークシート方式

→ 何が評価され、教育にどう影響があるか
共通1次、センター試験に対する根強い批判

■真正性・忠実性の要請

真正性 (authenticity) : 実生活の文脈に即したテスト

忠実性 (fidelity) : 測ろうとしている力を忠実に反映するテスト

→ 記述式、英語のスピーキング・ライティングを含む4技能試験

■記述式採点にかかる労力・コスト

現段階では、大規模・共通一斉試験に記述式問題を導入する最大の課題点は採点の過程にあり、それにかかる時間、コスト、信頼性などの課題あり

現行日程では、マークシート採点でさえ、マークの濃度や修正の仕方、あるいは消しゴムの滓などの要因によって、2度読み込んで同じマークと認定できない場合の確認作業など、現行のスケジュールでも精一杯！

29

コンピュータ導入の要請と課題

■記述式採点効率化の試み

記述式解答をOCR（文字読み取り装置）などでデジタル化 → 解答をクラスタリング

→ 同類の解答に同等の点が与えられる → 採点効率化

ただし、効率化には限界あり

クラスタリングされた解答群に対して、採点誤差が増幅される可能性の検証

■CBT導入の可能性

CBT (Computer Based Testing) : 自動採点システムなどが利用可能になれば、共通試験においても、記述式を含むパフォーマンス型試験の実行可能性は大

ただし、コンピュータを50万オーダーで準備するコスト

CBTの実行や自動採点に関わるシステム開発などの時間的余裕とコスト

コンピュータへの慣れ (adaptation) の程度の個人差

試験中のトラブル発生への対策

→ 教育環境の変化が先決 CBTに関わる研究開発の先行の要

記述式の採点にかかわる課題

- 大規模・共通一斉・選抜試験の記述式採点を短期間でできるのか？ どの程度の期間が必要か？
- センターが段階別成績表示を提供する場合、民間はどのように採点業務にかかわるのか？
- 選抜試験として信頼性の高い採点はできるのか？
- 受験生は自己採点できるのか？
- 条件付きの短文記述式で、求められる能力が評価できるのか？
- どのような内容（素材、文字数、問題数、難易度など）の問題になるのか？
- 出題方法、試験時間は？ 記述式だけ取り出して行うのか？
- 段階別成績表示を各大学がどのように活用するか？

31

マークシート問題にかかわる課題

- 思考力・判断力を一層重視した作問
- 各教科・科目の特性を踏まえつつ、学習指導要領改訂を見据えた作問
- これまでも学習指導要領・教科書準拠の作問であるが、大学教員が大学の視点から問題作成
- 作問傾向の「固定化」「専門分化」の改善
- 学習指導要領の趣旨・内容との連携をよりの確に確保
→ 高校の授業改善の契機となるような作問
 - 共通テストは、高等学校教育を通じて育まれた十分な知識・技能を前提として、思考力・判断力・表現力等を重視して評価する作問体制への転換等が必要であることを踏まえ、高等学校関係者や、高等学校教育の実態をよく把握している大学教員等を積極的に作問委員として委嘱するなど、これまでのセンターの作問方針・作問体制の抜本的な見直しを図り機能を強化する。（「大学入学共通テスト」実施方針より）

32

高大接続における共通試験の位置づけ

■現在のセンター試験 = 大学「が」実施する試験

荒井克弘 前試験・研究統括官（2014）

教育内容の構造からみても、高等学校教育と大学教育は、同心軸の上に積み上げられるのではなく、それぞれに独自の目標があり、それらがクロスする関係にある。……センター試験の問題作成委員はすべて大学教員であり、センター試験は高等学校教育の枠組みに縛られてはいるが、そのなかでどこまで、大学の求める知識、能力を出題できるか、そのぎりぎりのところで作成されている。その意味ではセンター試験の問題自体が大学から高等学校に向けた接続のメディアである。

■センター試験の問題作成 = FD（Faculty Development）

→ 高大接続の重要なつなぎの機能を果たし得る

■高大接続という観点から、共通試験をどのように位置づけるか

→ 正解のない問題であるが、センター試験の以上の機能も含めて、今、何が大切かを共有した上で、新たな入試制度設計を進めることが望まれる。

今後に向けて

- 新テストにおいても、持続性のある作題・実施体制や科目選択・時間割・得点調整・妥当性確認等の課題は継続 → センター試験の総括と新テスト設計へのフィードバックが不可欠
- 次世代テストに向けた検討 → CBTやIRTによる試験方法の実践研究
- 個別入試支援への取組み → 各大学のアドミッションズ・オフィス等との連携の模索
- 入試の適切性評価と受験者の追跡研究
- 高校へのウォッシュバック効果等についての実証的検討

ご清聴ありがとうございました